



## 第五話 秘密の湖の秘密

早朝にいたちのフクスケからボス猫とのもめごとを聞かされたその日、午前中は日差しが強かったので、さっそく湖畔の木陰にテントを立て、その中でイヤフォンで音楽を聴きながら湖をスケッチした。この短編集のための挿絵とするためだ。絵は上手でないが、きれいでない。魚や動物は漫画的になるが、風景は丁寧に写実的に仕上げているつもりだ、が途中で疲れたのでやめて横になって音楽だけを聴きいていた、ら眠くなっていつのまにか寝てました、が大きな音で眼を覚まされました。それはぼら親父の朝一番のジャンプでした。

それで約束どおり持ってきていた、いりこやトンビをぼら親父に投げてやることにしました。親父はまず深くもぐって3メートル近くのジャンプを見せてくれました。「ナイスジャンプ!」とぼくが声援と拍手を送ると、親父は、今の高さの半分くらいの高さにえさを投げてみてくれと言いました。

そこでいりこをその半分くらいの高さに投げると、親父は今度は水面を斜めに飛び上がり、いりこをぱくりと口にくわえました。「ナイスキャッチ!」ぼくはまた声援と拍手を送りました。それはまるで

バレーボールのバックアタックのような切れでした。放り上げたいりが落ちてくるのをキャッチするのではなく、いりがその放物線の頂点に達した瞬間にタイミングよく食いつくのです。親父はトンビも同じようにキャッチしました。一つもミスしませんでした。

やがて親父はほかの魚らにもジャンプさせましたが、タイミングが難しく、飛び上がるのが早過ぎてえさが来る前に水に落ちたり、反対に飛び上がるのが遅すぎてえさが頭上を越えた跡に宙を舞って空振りするのもいます。そうこうしているうちに突然からすが横から飛び出てきてトンビを横取りする場面もありました。とんびに油揚げをさらわれる、ということわざがありますが、これはカラスにトンビをさらわれたわけです。

ぼくはこのカラスとはあまり仲がよくなく、せつかくもってきたトンビを横取りされるのがいやで、また取られるのがトンビならまだしも、飛び上がった魚が捕まえられたらかわいそうだと思います、もう投げのをやめました。そして残ったいりことトンビを水面にばらまきコイやフナやカメに与えました。魚たちはお礼に5連続ジャンプなどを見せてくれました。圧巻だったのは数匹の小さな魚がひとつの大きな輪を描くように5連ジャンプをし、いきなりその真ん中からぼら親父が4メートルくらいのハイジャンプを見せてくれたときです。とはいえ彼もカラスが気になるのか、1回で終わりでした。

昼、コンビニで買った弁当を食べたあと、ボートに乗るためにボートを湖に押し入れていると、ぼら親父が、いいものを見せてやるからもぐって見ないかと声をかけてきました。暑い日だったので泳ぐのもいいと思いました。ぼくはかなりの近眼でいつも眼鏡をかけていますので、海などに潜るときは度付きのゴーグル（水中眼鏡）をかけます。そこでいったん家に帰ってそのゴーグルと海水パンツを持ってく

ることにしました。後者はこの湖にはザリガニがいるからです。

ぼら親父がいいものを見せてやるというのは、少々まゆつばもので、一杯くわされる危険もありましたが、きょうは彼の好物のいりことおまけにご所望のトンビをたくさん持ってきてごちそうしていたので、彼もしたてに出るはずで、いたずらが過ぎることもないだろうと思いました。と言うよりはお礼の気持ちからの好意であろうと思われました。

途中スポーツショップで耳栓を買って、そのとき目に入ったシュノーケルも買いました。ぼくは長くもぐってられないからです。シュノーケルには専用の大きなゴーグルがついているので、度付きのゴーグルは無用になりました。

湖に戻ると、ぼら親父が胸びれで手招きしたので、さっそく水に入りました。前に泳いだときもそうだったけど、この水は湖にしてはさほど冷たくないのです。ですから、きっと底のどこかに温泉がわいているのだらうと思っています。冬に来てみて凍ってなければきっとそうでしょう。得意の平泳ぎで気持ちよくあっちこっちへ泳ぎまわり、やがてぼら親父のいるあたりに行きました。そこは湖面が浮草に埋め尽くされており、きれいなイトトンボがたくさんいました。

「この下に見せたいものがある」というと、ぼら親父は浮草の下に潜り込みました。ぼくももぐり込みました。するとどうでしょう、なんだか小型の飛行機のようなものがぼんやり見えてきました。ぼんやりというのは、この湖の水はそれほど透明度が高くなく、しかも藻などの浮き草で湖面が覆われているので、湖の中でもこのあたりは特にうす暗くなっているからです。近づいて触ったりして見ると、飛行機の残骸がほとんど原形をとどめたまま沈んでいました。どうしてこんなところに飛行機が沈んでいるのか、と眼を疑いました。プロペラ機ではなく小型のジェット機のような翼（はね）の下にさびてはいるが形はりっぱなジェットエンジンがついています。胴体に文字らしいものが見えたのでその汚れを手で除くと、現れた文字から旧日本軍の戦闘機だとわかりました。そしてこれが不時着や撃墜されたものでないことはどこにも破損した形跡がないことからうかがえます。これは大発見だ、どうしたものだろうか、と思いました。

「これがわしのすみかだ。歴代の湖の主はここをすみかにする。」ぼら親父が言いました。そしてよく見るとひとり乗りの小さな操縦室には先ほど投げたトンビのいくつかがちやんと蓄えられていました。

「この飛行機はどうしてここにあるんだろう」ぼくは首をかしげ両方の手のひらを上に向けるジェスチャーで聞きました。

「先代から伝わる話によると、これは新型の飛行機とやらで秘密の装置が仕込まれていて、それを敵に知られなくするためにここに隠したという言い伝えだ」

「そうか、確か日本は終戦が近づくころなんとかというジェット戦闘機を開発していたからそれのたぐいかもしれないな。戦争に負けそうになったとき、この秘密兵器をここに沈めて隠したわけか」

「まあ、そういうところのようだ。亀の尾ナシ、こいつは今99歳というからその頃のことを目撃した唯一のこの住人なんだけど、その尾ナシじじいの話によると、大勢の人間がこの飛行機を押してここまで来て、ボートを浮かべ長いさおで一番深いあたりを探って、飛行機を湖に浮かせそこまで移動して、窓などを開けて沈めたそうだ。」

「なるほど、水は適度に濁っていて、このあたりは深いところまで見通すことができないからな」

「初めは油が浮いて大変くさくて、みんな永らくその近くには寄り付かなかった。その頃の湖の主は鯉で、やがてその飛行機をすみかにするようになった」

「なるほど」

「それ以後、今までに誰もここにこの飛行機を見に来た人間はいない。たくさんの樹木も育って、昔あった道は埋もれ、この湖の周りの木々は高くなり、枝々も広く伸び、湖面はおおかた蓋をされたようになった。はじめおまいさんが来てボートなど浮かべたときには、もしや飛行機を調査しに来たのかと思ったがな。まあすぐちがうとわかった。泳いでても、カエル泳ぎばかりで、もぐるようすがなかったからな。」

「調べたらこの湖は地図に載ってないんだ。だから、ここに飛行機が沈められていることをもう誰も知っていないかもしれないな。戦争が終わって半世紀以上たったんだし、秘密の装置といってももう時代遅れのものに違いないし」

「そりゃそうだ。もう秘密じゃなくなってるさ」

「そうするとこの飛行機を調査しても特に得るものがないばかりか、かえってその存在を暴露したら何

か不都合を招きかねないと思ったんだろう。進駐軍によって何かの罪に問われかねないからね。だから関係者はみなこのことは誰にも言わないことにしていたのだろう」

「それで地図からも抹殺されたのかもな。それはおれたちにとっては都合のいいことだ」

ぼくはこの旧日本軍の新型ジェット機を思う存分観察した。はじめはぼんやりしていたが眼が慣れたのかはつきり見えるようになった。水面に戻ると、太陽はかんかんでりだ。浮き草がたくさんあっても水中のようすがよく見ることができたわけだ、とわかった。

「親父、ありがとう。きょうのことは恩に着るよ。すばらしいものを見せてもらった。君の住いが誰からも荒らされることのないように、この湖の秘密はしっかり守るよ。」

「また見たくなったらいつでももぐれよ、ひろし」

「ああ」

「きょうはテントでお泊りかい」

「いや、日没までには撤収する。あすは仕事がある。そのうち泊りがけで来るから一杯やりながら話そう」

「そうだな。うまい酒を持ってきてくれ。おもしれえことをいろいろ話して聞かせてやるからさ」

ぼくは岸まで泳いでいき、またテントにもぐって、さっそくジェット機の絵を描きはじめた。何度も直していると、これは本物の写真がどこかにあるはずだと思った。少なくとも外見の写真は残っているはずだと思った。そこで、モバイルパソコンで調べてみた。するといろんなことがわかった。

旧日本軍はドイツ国から入手した肝心のエンジン部分のない不完全な設計図を参考にして、ほぼ独自の設計でほかにもう一機だけジェット機「橘花」を製造しており、こちらは進駐軍が到着する直前に操縦室を爆破したそうである。進駐軍はすぐに操縦室をもとの状態に復元するように命令したという。今はこれはアメリカのスミソニアン博物館に保管されているそうだ。

さて、何が日本人をして橘花の操縦室を爆破せしめ、もう一つのジェット機を湖に沈めさせたのか・・・いちど湖のジェット機の操縦室をよく調べてみようと思っている。

そしてとりあえず今は橘花の写真を参考にしながらこのジェット機のスケッチを完成させた。橘花は美しい形をしており、湖の中で見たものよりも簡素であった。